



首里城明け渡しと御嶽

後田多 敦 (非文字資料研究センター 研究員)

今年度から非文字資料研究センターの研究員に加えていただきました。「海外神社跡地のその後」チームに参加します。これを機会に「非文字資料」を自分の研究方法と自覚的に結びつけたいと考えています。よろしくお願い致します。

私は近代日本の成立過程やその特質を、周縁の琉球・沖縄から捉え直すことを研究テーマの一つにしています。現在も日本の「国境」はざわついています。日本の近現代の歩みは「境」の拡大と縮小、または「境」をめぐる歴史ということもできます。そのシンボリックな存在の一つが琉球・沖縄です。琉球・沖縄は、日本の「外」と「内」の間で揺れてきました。日本と琉球・沖縄の関係は、日本とアジアや太平洋の地域や国々との関係を理解する指標でもあります。このような視点から、琉球の祭祀と東アジアの冊封体制の揺らぎと解体過程を軸に取り組んでいます。

*

琉球・沖縄の歴史や文化を理解しようとするときに、その背景にある要素として見落とすことのできないものが「風」と「水」、「風水」です。日本の「風土」との対比で考えれば、理解しやすいと思います。

小さな島々で成立していた琉球国では、水は特に貴重なもので、それゆえに信仰の対象ともなりました。川のない小さな島に残る湧き水を発見した動物の物語や、水源の発見にまつわる伝承などは、島における水の貴重さの証でもあります。

琉球国の王都だった首里地区に、弁が嶽という祭祀空間でもあった小高い丘があります。琉球の祭祀は国家祭祀として、国王の長寿や国家の安泰、五穀豊穰や航海安全などを祈願しました。その祭祀を行う公的空間の一つが御嶽(うたぎ)です。弁が嶽は国王が親祭するなど、御嶽の中でも特別な位置にありました。弁が嶽は首里城の東方にあり、首里地区でもっとも標高の高い地点です。域内に信仰の対象ともなってきた湧き水があり、弁が嶽に始まる水流は安里川、真嘉比川など首里城を囲むよう

に流れています。本来の御嶽は一般人の入れない、保護された場所です。水源だから御嶽にしたのか、御嶽に適した場所がたまたま水源だったのか。いずれにしても、弁が嶽の場合は重要な御嶽であることで、水源としての機能を維持することにもなりました。ちなみに第2次世界大戦中は日本軍の施設も造られていました。現在は、かつて首里城内にあった沖繩神社(「神社」というよりも、沖繩の拝所のようになっています)もあります。

首里地区で2番目に標高の高い場所が、首里城です。首里城内には湧水口が2か所あり、その水が円覚寺放生池や弁財天堂のある円鑑池、そして龍潭へと注ぎ、さらに首里から那覇へと流れていきます。この水の涵養地が首里城内にある京の内と呼ばれる場所で、そこにもまた御嶽がありました。首里城内には10か所の御嶽がありましたが、その多くは京の内です。琉球国の王都の水源は、王城の御嶽と国王が親祭する重要な祭祀空間に守られていました。

琉球の祭祀の対象として重要なのは、前述の御嶽の神ともう一つが火ヌ神(ひぬかん)です。火ヌ神の説明は難しいのですが、火に由来し琉球の民族宗教の根幹をなすものと簡単に説明しておきます。火ヌ神は家庭から国家レベルまで存在します。首里城内には首里城の「御タウグラ火神(台所の火ヌ神)」と「御火鉢之御前(うばちぬうめー、琉球国の火ヌ神)」がありました。「御タウグラ火神」は一般家庭の台所の火ヌ神と同じと考えていいのですが、「御火鉢之御前」はまさに琉球国の火ヌ神でした。

*

さて、ここから本題です。

琉球国の王城であった首里城は国王の生活の拠点で、中央政府の役所、そして琉球国の火ヌ神「御火鉢之御前」を祭り、御嶽など祭祀や儀礼の空間も抱える場所でした。明治政府は1879(明治12)年、国王尚泰を追い出し、その首里城を接收します。「琉球処分」と呼ばれる琉球国併合、琉球国滅亡の瞬間です。軍隊を率いて処分を担

当した松田道之は首里城の門を閉鎖し、持ち出しを制限しました。その時、「御火鉢之御前」を城外に持ち出したという話があります。持ち出した先は、国王が仮寓した中城御殿（なかぐすくうどうん、世子の屋敷）です。さて、10か所あった御嶽（の神）はどうなったのでしょうか。

国家滅亡と王城の引っ越しという混乱で、その状況を伝える琉球側の文字資料は多く残されていません。行政資料や外交文書など、琉球国の国家資料は、基本的に明治政府に接収されました。国王側が持ち出すことのできた資料やモノは、明治政府にとって重要ではなかったと理解していいでしょう。中城御殿などへ持ち出したそれらのモノも、沖縄戦でほとんどが消失しました。中城御殿自体が沖縄戦で破壊されたからです。また、明治政府が接収した資料の多くは、関東大震災で消失したとされています。

首里城が接収された際、「御火鉢之御前」は中城御殿へ移されました。そして、結論からいえば、御嶽（の神）も移された（空間そのものは移動できないので、城内の御嶽に相当するものを新設した）と考えています。つまり、琉球側の祭祀対象はすべて城外へ移されたということです。しかし、そのことを具体的に伝え、裏付ける資料は確認できません。

そんなことを考えているとき、1枚の写真に出会いました。戦前の中城御殿内の屋敷内の写真、写っていたのは木々が生い茂った「御嶽」です。写真説明には「拝所」とありました。別の写真では「御嶽」と説明されていました。琉球国の滅亡以後、かつて国の公的祭祀空間だった御嶽は場所が分からなくなったり、変質し「拝所」と説明されたりする事例もあります。中城御殿の「拝所」は「御嶽」で間違いないでしょう。

戦前の中城御殿にはかつての首里城と同じように、御嶽があったこととなります。これは極めて重要なことです。御嶽は公的施設ですので、基本的には個人の屋敷にはありません。最後の中城御殿は琉球国滅亡直前の1873（明治6）年に新築移転されたものです。しかも、御嶽のあったエリアは、当初からの敷地ではなく、1883（明治16）年以降に拡大されたと考えられます。だとすれば、その御嶽は首里城明け渡し後、つまり琉球国滅亡後に作られたこととなります。琉球国の国家祭祀のための空間が、琉球国滅亡後に創設されたということです。

首里城が明治政府に接収された後、中城御殿では増改築が行われ、さらには施設の用途変更なども行われました。幾つかの状況から、屋敷の向きの修正もあったと考



えています。琉球国の火ヌ神「御火鉢之御前」も移されていきました。だとすれば、中城御殿に新設された御嶽は、首里城内の御嶽の代替施設ではないか、そんな推測が可能です。つまり、中城御殿は、接収された首里城（王城）の代替施設（いわば王城）と位置づけられていたということです。

国王が去り、琉球祭祀の対象が不在となった首里城（跡）やその地下には、やがて日本の祭祀空間「沖縄神社」や日本軍の司令部壕がつくられました。それはその空間の支配者と利用目的が変わったことを象徴的に示しています。

首里城を立ち退いた王家は、中城御殿を首里城の代替として使いました。しかし、積極的に王城として位置づけ、利用したとする直接的な資料はありません。それでも、そのことは証言や写真、空間の配置、行事や部分的な関連資料などから推測できます。国家祭祀空間の創設ということ自体も、その証拠の一つになると考えます。

敗者が抵抗を文字資料として残すことは困難ですが、何らかの「痕跡」は残ります。琉球国の滅亡過程を調べるなかで、残された「痕跡」を資料として活用する工夫の必要性を感じてきました。その点でも、そこは「非文字資料」の現場の一つになると考えています。

*

【参考】

後田多敦「琉球国滅亡後の国家祭祀と中城御殿」（『南島文化』35号、沖縄国際大学南島文化研究所、2013年）

【写真】

中城御殿跡地にある御嶽の跡。中城御殿は発掘調査などが行われており、将来的には中城御殿を復元する計画がある。

（撮影は筆者、2011年）